



Title	ブータンに学ぶ観光開発の哲学 : GNHとツーリズムの関係性についての一考察
Author(s)	山村, 高淑
Citation	観光文化, 188, 18-21
Issue Date	2008-03-20
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/34651">http://hdl.handle.net/2115/34651</a>
Type	article
File Information	bunka188.pdf



[Instructions for use](#)

# ブータンに学ぶ観光開発の哲学

## GNHとツーリズムの関係性についての一考察

北海道大学観光学高等研究センター 准教授

山村 高淑

### はじめに

我々、北海道大学観光学高等研究センターは、二〇〇六年度より財団法人日本交通公社の特定研究プロジェクト「コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する調査研究」に共同研究の形で参画させていただいている。コミュニティ自身が自律的にツーリズムをコントロールし、自らの社会・文化の発展につなげていくための方策を、国内外の先進事例から探っていくというものである。

さて二〇〇七年十一月二十四日から十二月四日にわたり、この研究の一環として、ブータン王国での実地調査を行った。その目的は、「GNH (Gross National Happiness: 国民総幸福量) とツーリズムとの関係性」について、調査団員各自の専門分野の視点から考察することであった。本稿では筆者の専門分野であるヘリ

テージツーリズム(文化遺産観光)の観点に偏ることをお断りしつつ、このブータン調査で得られた知見の一部を報告したい。

### GNH(国民総幸福量)とツーリズム

GNHは一九七六年、当時二十一歳だった第四代ブータン国王により提唱された、社会経済開発のための概念である。一九九九年、当時の首相であったロンポ・ジクメ・ティンレ氏はGNHを構成する四つの柱を明らかにした。すなわち、①健全な経済成長と開発、②環境の保全と持続可能な利用、③文化遺産の保護と振興、④良き統治、の四つである。では、こうしたGNHの考え方とツーリズムとの関係性はどのようなものなのか。

今回、幸運にも我々調査団はこのジクメ・ティンレ元首相に直接お会いしてお話を伺う機会を得た。我々の問いに対する元首相の回答は

極めて明快だった。元首相によれば、ブータンの観光政策におけるGNHの意味は、上述した四つの柱のうち、④良き統治によって、観光をその他三つの柱の実現に貢献させていくことにあるという。すなわち、

- (一) ツーリズムを雇用の創出、地域の経済発展に役立てること
- (二) ツーリズムを自然環境の保全に役立てること
- (三) ツーリズムを文化遺産の保全に役立てることである。

そしてそのために「クオリティ・ツーリズム」の推進が重要であるという。「ハイ・クオリティ、ロー・ボリューム(ロー・インパクト)」という原理原則に従って観光開発を行うべきだというのである。

つまりこういうことである。(一)の経済発展のためには観光収入増を目指すべきである。しかし(二)や(三)の、自然環境や文化遺産の保全のため

には、観光客数が地域のキャパシティを超えないようにすべきである。ではどうするか。量より質を目指すのである。自然や文化について十分な理解と敬意を示し、かつ高い客単価で滞在する旅行者に来てもらおう、というのである。

ジクメ氏によれば、こうした理念を実行に移す際に重要なことは、まずは自らが提供するサービスの質を向上させ、その結果として質の高い旅行者に来てもらう、という順序であるとのこと。そして最終目標は「ハイ・クオリティ・DESTINATION（質の高い目的地）」としてブータンの国際的地位を確立することにあるという。

「高い質」を実現するためには、国民が環境と文化に対して、より高度な教育を受け、敏感になり、敬意を持つようにならないといけない。その根幹を成すものが「センス・オブ・プライド（自尊心）」である、とジクメ氏は繰り返し強調する。「自尊心」——我々日本人が忘れて久しい言葉である。

### ブータンのヘリテージツーリズムの持つ意味

このようなブータンの観光開発哲学は、外交面でも極めて重要な意味を持つ。なぜなら、中国とインドという超大国に挟まれた小国ブータ

ンが国際社会にアピールできるものは、軍事力でも経済力でもなく、豊かな自然とユニークな文化でしかないからだ。特にブータンの政策のあらゆる面で「ユニークな文化」は強調される。独自の文化こそが「自分が何者であるかの定義」なのであり「自尊心」の源である。そしてこれこそが、国家が独立の体を保っていくための根幹となる。このような意味でブータンにおいては文化遺産の保護、さらにはそれを活用したヘリテージツーリズムのあり方は特別な意味を持っているのである。

こうした姿勢は、むやみやたらに世界遺産を登録しないという態度にも表れている。目下、ブータンは世界遺産登録物件を一つも持たない。しかし内務文化省文化局の建築遺産保護担当者によれば、登録申請については決して急がないし、また無理にする必要もないという。担当者は言う。世界遺産に登録する方法を考えるより、建築遺産をそのまま使い続ける手法を考えることのほうが大切なのだ、と。

ブータンの建築遺産の特徴は、寺院やチョルテン（仏塔）、ゾン（寺院と地方行政としての機能を併せ持つ複合建築）や民家に代表されるように、昔ながらの用途で使われ続けている点にある。そのため世界遺産に登録するとなる



伝統的な民族衣装「キラ」を身にまとうトンサ県職員。公務員の制服は男女ともに民族衣装である／トンサ県にて筆者撮影

と、さまざまな制約が出てくる。一言で言えば、保護建築になつてしまえば修改築がままならなくなると、使い続ける上で困ることが多いのだ。世界遺産に代表される建築遺産の保護に関する国際的な議論はあくまでも西洋的価値観主導の論理であり、決してブータンの文化にそのまま適用できるものではない。また木造建築は絶えざるメンテナンスが必要で、木造文化としての保存の枠組みと理論が必要である。したがって、もちろん世論の一部には世界文化遺産に登録したい、という議論はあるものの、目下、じっくり今後のあり方を検討しているのだという。そう、自らの頭で、自文化の価値について

考えているのだ。世界遺産制度に価値判断を委ねてしまわない。これこそが「自尊心」である。

まさにこうした態度こそがブータンの文化遺産を、そしてヘリテージツーリズムを極めて魅力的なものにしているのである。我々旅行者は、ブータンのどこへ行っても、生きた建築遺産に触れることができる。そして旅行者自身があたかも巡礼の旅をしているかのような感覚にとらわれる。常に細やかに手入れされた建物には歴史の連続性があり、住民の生活にあふれ、真剣な祈りの姿がある。

一つ具体的な例を挙げよう。プムタン県にクジェラカンという、王族ゆかりの寺院がある。建造年代の異なる巨大な三棟の建物が並ぶ寺院である（それぞれの建造年代は、一六五二年、一九〇〇年、一九九〇年）。この寺院を前にして、誰もが驚くことは、これら歴史的に建造年代の異なる三つの建物が、まったく違和感なく、その時代差を感じさせずに堂々たる存在感を示していることである。これこそがまさに使われ続けている証拠であり、生きた建物としての圧倒的な存在感である。

## では一体「幸福」とは何なのか

ブータンの旅は、町や村の美しさは決して建



クジェラカン。向かって右の棟が1900年、左の棟が1990年の建造である／プムタン県にて 筆者撮影



ブータンの旅は巡礼である。至る所にダルシン（経文旗）がはためく。旗布には経文が印刷されており、風に乗って仏の教えが広まるのだという／ヨトン・ラにて 筆者撮影

築の様式美からなるものではない、ということも教えてくれる。真の美しさとはそうした建築や景観を創り出している生活の美しさにはかならないのだ。では美しい暮らしとは何だろう。それはきっと人の心・精神の美しさに帰結するのだと思う。寺院で無心に祈る人々を見て、我々は心や精神の美しさの根底に信仰の力があることに気づく。ブータンでのそれは「仏の教え」である。

仏典に「因縁生起」という言葉がある。「縁起」の語源で、世界の一切は直接的にも間接的にも何らかの形でそれぞれかわり合っており消滅変化している、という考え方である。ブータン研究センターのカルマ・ウラ氏によれば、この

考え方が「幸福」を理解するうえで非常に重要であるという。つまり、幸福は相互に与える関係であり、相互信頼に基づく有意義な関係性を持つことにある、というのである。

さて、冒頭で述べた、観光の質を上げること、結果として質の高い観光客に来てもらうというクオリティ・ツーリズムの考え方における質とは何であろうか。実は「幸せ」こそが「質」なのではないか。つまり、因縁生起の考え方に照らし、こう考えてはどうだろうか。地域住民は旅行者の幸福に貢献できるよう振る舞う。そして旅行者は地域住民の幸福を実現するための助けとなるよう行動する。地域住民と旅行者は



相互に幸せを与え合うことができるのだ。こうした相互信頼の関係を観光の現場において構築していくこそが、ブータンのGNHの概念に基づく観光開発なのではないか。

しかし、事はそう簡単ではない。なぜなら、「幸せ」とは各人それぞれで異なる価値を持つからだ。つまり、多様な価値観の存在が担保されて初めて「幸せ」は成立するのだ。今後、ブータンにおいても各人の価値観はますます多様化するであろう。そうしたときに、果たして仏教的価値観はそれを束ねる求心力を依然として持ち続けることができるであろうか。

ブータンの現在から我々が学ぶことは多い。しかしGNHの考え方がいまだ答えの出いていない大いなる社会実験であることも確かである。また政治的にも君主制から本格的な議会制民主主義への移行の途上にある(今年二〇〇八年、新たに国会を開会し、立憲君主制に移行する予定)。ブータン国民は自らどのような「幸せ」の答えを出すのであろうか。今後の推移を見守りたい。

## ブータンから学ぶこと おわりに代えて

ブータンの観光は決して「ハレの観光」ではない。あくまでもローカルな生活そのものが主

体であり、宗教や信仰の現在そのものを目の前に提示する。これは、もはや見る旅ではなく感じる旅である。こうした「生活文化を感じる旅」こそコミュニティ・ベースド・ツーリズムのあるべき姿であり、それを成立させるためのヒントがブータンにはある。

もちろん、ブータンの良い面ばかりを取り上げて美化することは本稿の目的とするところではない。当然のことながらブータンもさまざまな社会問題を抱えている。紙幅の都合上、こうした点については別の機会に譲るが、しかしいずれにせよ、ブータンが我々日本人に多くの示唆を与えてくれる事例であることには間違いない。大国の狭間で小国はどう生き延びていけばよいのか。ユニークな伝統文化をどのように継承していったらよいのか。わが国にも共通する課題ではないか。

観光開発について言えば、ブータンの事例は、開発にはそれを支える哲学が必要不可欠であることを示している。今後、我々日本人はその哲学を一体どこに求めたらよいのか？ 果たしてビジット・ジャパン・キャンペーンで

一千万人来日すればわが国民は幸せになれるのか？ これは高度経済成長を支えた数の理論とどこが違うのか？ そう考えると現行の観光立国の議論が極めて表層的であることに気づく。

我々日本人は「幸せ」について、いま一度しっかり考えるべきである。ブータンから学ぶことはまさにこの一点に集約される。生き方や幸せそのものについて、我々の風土に即して指針を与えてくれる哲学が、我々の歴史と文化の中にきつとあるはずである。自文化としっかり向き合い、過去の歴史をひもといていけば、答えはおのずと分かってくるのではないか。二一世紀とはそういう時代なのである。

(やまむら たかよし)



トンサ・ゾン(トンサ県庁舎)で伝統舞踊の練習をする地域住民。ゾンは地方行政と宗教施設の複合建築でその中庭は地域の広場としての役割も担う/トンサ県にて 筆者撮影